

口羽家住宅

口羽家は、江戸時代（1603–1867）に長州藩を治めていた毛利家の家臣である。口羽就通（年代不詳）は、1674 年に家臣の中でも高位である頼組に任命され、その一家は 1868 年の徳川幕府滅亡までその職に就いた。

この住宅は江戸時代の上級武家屋敷の好例である。長屋門や、建物を囲む白壁は特に保存状態が良い。

家の中には、口羽家の身分を示すような細かな情報がたくさんある。例えば、ほとんどの部屋の天井が高く、屋根裏の物置スペースを必要としないくらい、この家族は広い土地を持っていたことを示している。家のメイン部分となる 2 つの部屋に挟まれた異例の狭さの部屋は、「間の間」と呼ばれる。攻撃を受けたときに、主人のもとに駆けつけるため、衛兵たちがこの狭いスペースに待機していた。このようなスペースは、「武者隠し」と呼ばれた。

現在は一般公開されており、内部には江戸時代の武器や武具が展示されている。その中でも注目すべきは、武将が作戦を指示したり、武士を最も効果的な場所に移動させたりするために使用していた馬印である。しかし、展示されている武器は貴金属がちりばめられているので、通常の使用のためというよりも、儀式のための「虚飾の武器」である可能性が高い。